

衣崎ノリ漁場の芽落ち対策試験

瀬古幸郎・岩田静昌
今泉克英・日比野光

目的

衣崎真野地先ののり漁場は育苗期に毎年芽落ちが発生している。特に昭和61年度は10月14日頃からノリ芽の流出が始まり、その被害は例年になく拡大した。そこでその原因究明のため、水試と西三河事務所水産課、衣崎漁協、衣崎のり研究会が共同で2年間にわたり調査したので、その概要をまとめた。

調査担当機関

西三河事務所水産課、水産試験場
(協力) 衣崎漁協、衣崎のり研究会

調査の経過

61. 10. 8 ~ 14 衣崎のり漁場

一部の漁場でのり芽が流出

61. 10. 20 衣崎のり漁場

のり芽の流出範囲は拡大、11月に入るとその範囲は衣崎全漁場の50%以上を占めた。この時点では二次芽はもちろん珪藻等の藻類も付着していなかった。健全な移植網は3日で流出した。(干出しない方が若干良好)

61. 11. 6 衣崎漁業組合

実施機関 衣崎漁業組合長、理事
衣崎のり研究会、水産試験場
西三河事務所水産課

被害状況調査(漁協での聞き取り、漁場調査)、サンプル採取(港内採泥等)

61. 11. 10 衣崎のり漁場

実施機関 水産試験場

ノリ培養試験用海水採取(4箇所)

衣崎漁協研究会によるパイロット網の張込監視開始

61. 11. 10 水産試験場

実施機関 “

衣崎漁場海水によるノリ芽培養試験

衣崎ノリ漁場、一色ノリ漁場、水試濾過海水により、二次芽の培養試験を実施したが、ノリ芽の成長・細胞の異常等について、有意な差は認められない。

被害漁場のノリ葉体成長試験

被害漁場内で採取したノリ葉体の成長試験を実施したが、病害の拡大は、認められず、二次芽・果胞子の放出による葉体縁部の脱落は認められたが、その他は異常は認められなかった。

61. 11. 12 ~ 16 パイロット網の芽落ちがなくなる。

61. 11. 21 現地

実施機関 西三河事務所水産課

真野水門に自記式TSメーター設置

11月25日から11月28日まで測定、1日平均では約16,000㎡が排水機から排出される計算となる。11月21日から12月3日までの測定で

は、大潮時は自然開閉により淡水が排出され小潮時には機械排水となる。

61.11.26 衣崎のり漁場
実施機関 水産試験場、衣崎のり研究会
衣崎漁業組合理事
西三河事務所水産課

真野水門からの淡水拡散調査（20地点）
水温・塩分・溶存態無機窒素の測定により淡水の拡散状況を調査したが、潮位が6号線とやや高く、淡水の拡散は、小範囲にとどまりノリ漁場内への拡散は、顕著に認められなかった。

61.11.29 現地
実施機関 水産試験場
ノリ培養試験用試水採取（真野水門内）

61.12.1, 62.1.21 水産試験場
実施機関 水産試験場
真野水門内試水による培養試験実施
真野水門、塩田埋立地の排出液について、これらをベースに人工海水とした試水によるノリ芽の培養試験を実施した。成長・健全率等、対照区より若干の差が認められるが、希釈されて漁場内に入るため、影響はさらに小さくなるものと思われる。

62.3.19 衣崎のり漁場
実施機関 水産試験場
真野水門からの淡水拡散調査（11点）
3月19日の最干潮時（0号線）に真野水門からの淡水の拡散状況を水温と塩分の測定結果から検討したが、芽落ちのみられた広範囲に淡水が流入する確証は得られない。

62.7.17 衣崎漁業組合
実施機関 衣崎漁業組合長、理事
衣崎のり研究会
水産試験場本場・漁民相談員
西三河事務所水産課

昨年の被害状況，水産試験場本場調査案，

西三河事務所水産課調査案の説明。のり芽落ちに関係していたと思われる事項についての総合討論の結果，真野港，伍水門，2点の水の希釈水で，のり芽を培養することと，ローダミンを流して潮流観測をすることに決定。

62.7.28 水産試験場
～7.31 吉田のり培養場
実施機関 西三河事務所水産課
漁民相談員
水産試験場（協力）

真野港奥（冷蔵庫前），真野港口，真野港前ミオ，矢作古川河口，伍水門，S商店排水計6点の希釈水でのり芽を培養，真野港前ミオ，S商店排水の10倍希釈水で，のりの芽付きに影響がでる。しかし100倍希釈では全く異常が無く，水量，位置等からS商店の排水を原因と考えることは難しい。ミオ筋は漁場内にたくさんあり，そのヘドロが有害物質を出しているのではないかと疑いを持つ。6点のDINを測定したが，有害になる値を示さなかった。

62.8.5～8.7 水産試験場
実施機関 衣崎のり研究会
西三河事務所水産課
漁民相談員
水産試験場（協力）

衣崎漁場内のミオ筋のヘドロ間隙水の希釈液でのり芽培養。真野港内，真野港前のミオ筋全域，伍横ミオ筋のヘドロ間隙水の10倍希釈水で芽つきが少なくなる。

62.8.19 衣崎漁業組合
実施機関 衣崎漁業組合長・理事
衣崎のり研究会
水産試験場 漁民相談員
西三河事務所水産課

調査日時，項目，方法の検討と作業分配。
ローダミンを使用しての事前潮流調査と検討。

62. 8. 24 衣崎漁業組合
実施機関 衣崎漁業組合理事
衣崎のり研究会
水産試験場 漁民相談員
西三河事務所水産課

拡散調査，定点観測，染料拡散調査（ローダミンを使用しての潮流調査）を行う。

62. 8. 25 水産試験場本場
実施機関 西三河事務所水産課
水産試験場本場

昨日（8月24日）の調査で採水したサンプルの栄養塩調査と塩検。

62. 8. 25 ~ 27 水産試験場本場
実施機関 西三河事務所水産課
漁民相談員
衣崎のり研究会

衣崎漁場内ミオ筋，真野港内のヘドロの間隙水の10倍希釈液で，のり芽を培養。すべての間隙水にへい害作用があり，特に真野港近辺はそれが強かった。

62. 8. 25 ~ 27 水産試験場
実施機関 西三河事務所水産課
漁民相談員
衣崎のり研究会

上記のヘドロ間隙水に，密閉静置，窒素ガス通気，エアレーション，密閉静置後培養開始時Na—EDTA．50ppm添加，以上4処理を施し，これの10倍希釈液を用いて開及び閉でのり芽培養。還元状態にあるほうが，悪影響強い。

62. 9. 11 衣崎漁業組合
実施機関 衣崎漁業組合長・理事
衣崎のり研究会
水産試験場 漁民相談員
西三河事務所水産課

8月24日に行った漁場調査の結果報告会。潮流調査を行った結果，毎年芽落ちする場所

に真野港からの排水は流れない。真野港に通じるミオ筋中のヘドロ間隙水にのり芽にへい害を及ぼす物質があったが，昨年見られたような幼葉の脱落を起こすものではなかった。H₂S，NH₄-N 単独では，のり芽に影響なし。また鋳物工場の磨砂，ウナギ排水，S商店の排水も影響なさそう。今年度の対策として，パイロット網を斜に張ってモニターし，安全と分かってから網を張り出すことに決定。

62. 9. 25 ~ 27 吉田のり培養場

実施機関 衣崎のり研究会
西三河事務所水産課

漁期前に，漁場内の10ヶ所から採水を行いそれで，のり芽を培養。河口サンプルで低比重の影響による成長劣が見られたが，他は影響なし。

62. 10. 5 衣崎漁場
実施機関 西三河事務所水産課

漁場内の水温分布調査。のり芽に影響を及ぼしそうな水温にはならず。

62. 10. 5 ~ 7 吉田のり培養場
実施機関 衣崎のり研究会
西三河事務所水産課

真野港前のミオ筋の表層，底層など5サンプルの水で，のり芽培養。のり芽のサンプル悪く，結果は，はっきりしなかった。

62. 10. 7 衣崎漁業組合
実施機関 衣崎のり研究会
西三河事務所水産課

パイロット網の張り出しの打ち合わせ。真野港に一番近い所に，5号から10号の高さに斜張りする。パイロット網の，のり芽が流れた場合，連続観測することに決定。アオサの腐ったものが，芽落ちの原因では？と研究員から意見が出る。

62. 10. 9 ~ 12 吉田のり培養場
実施機関 衣崎のり研究会

西三河事務所水産課

衣崎漁場で採取したアオサをしぼり、得た海水で、のり芽培養するが異常なし。

62.10.12 吉田のり培養場

～11.10

実施機関 西三河事務所水産課

3日～25日間腐敗させたアオサの間隙水でのり芽培養。5日以上のもので細胞は死、芽脱落なし。

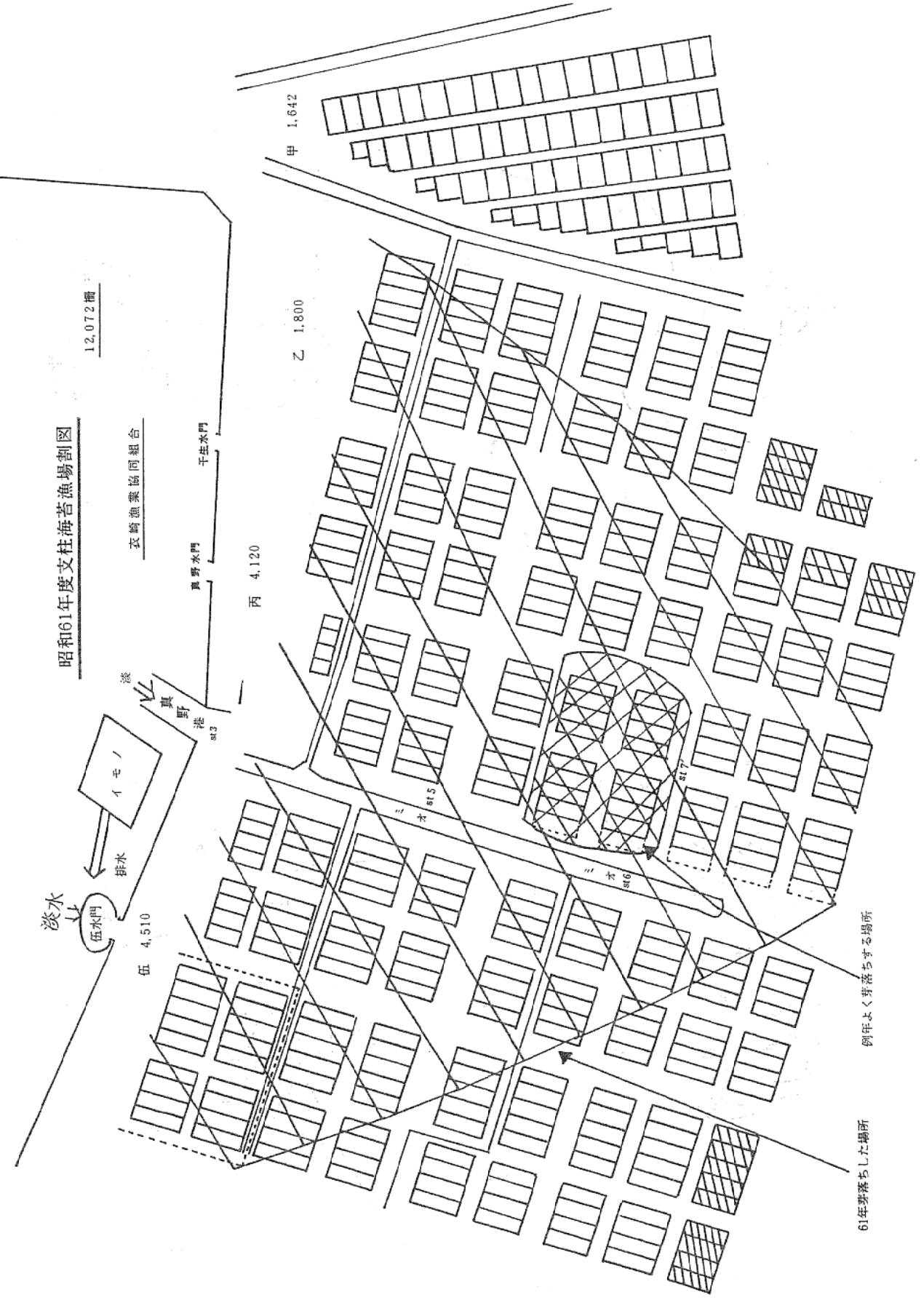
なお、のり培養試験方法は、

① 取水は0.8メンブランフィルターで濾過し、これをベースに希釈人工海水を作成した。

② 培養は試水を300cc容酸素ビンにとりその中に幼芽の付着したハイセックス単糸を入れ空栓、3日間の静置する。培養条件は水温18℃、7,000ルクス9.5時間明期とした。

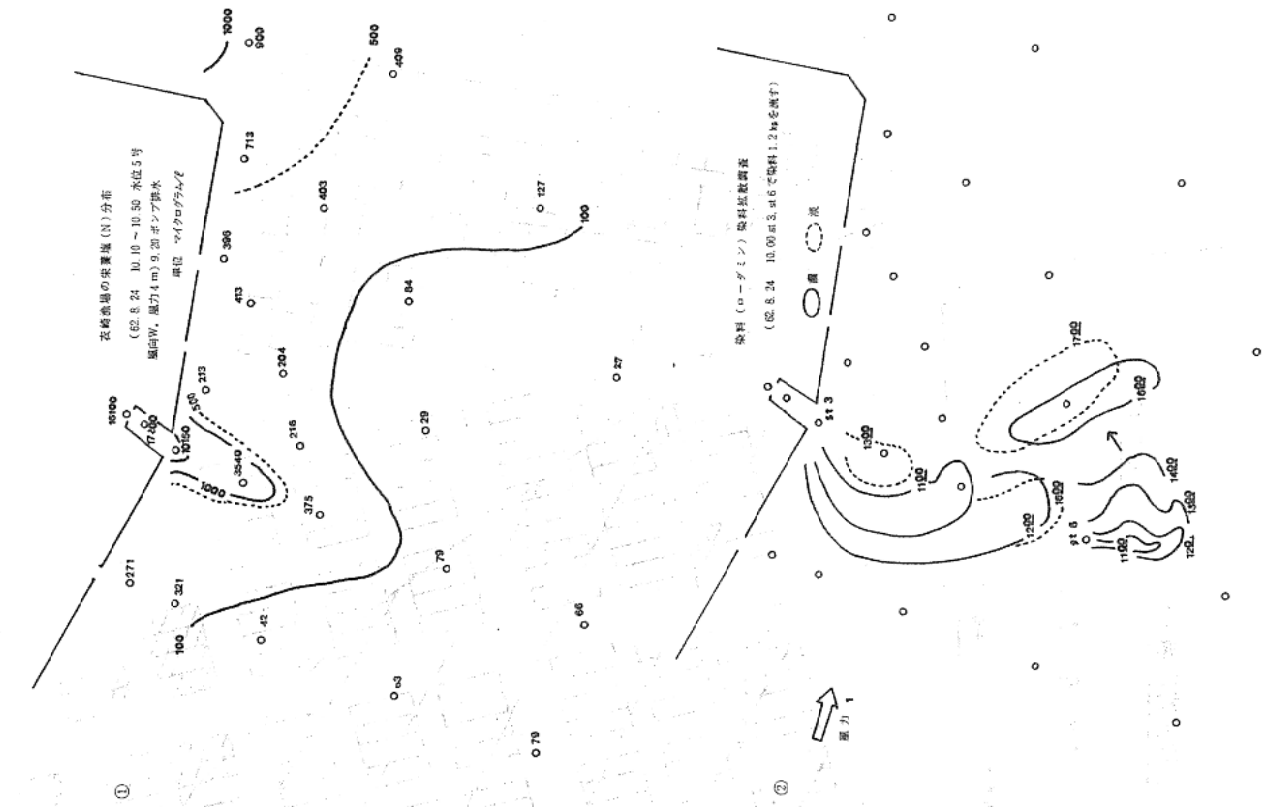
昭和61年度支柱海苔漁場劃図

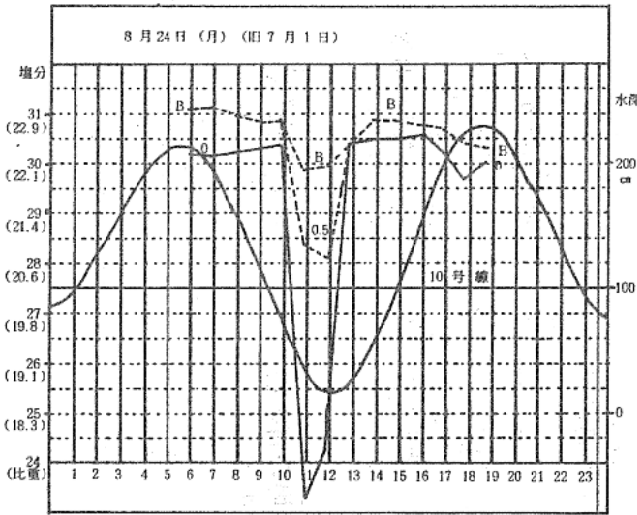
12,072 畝



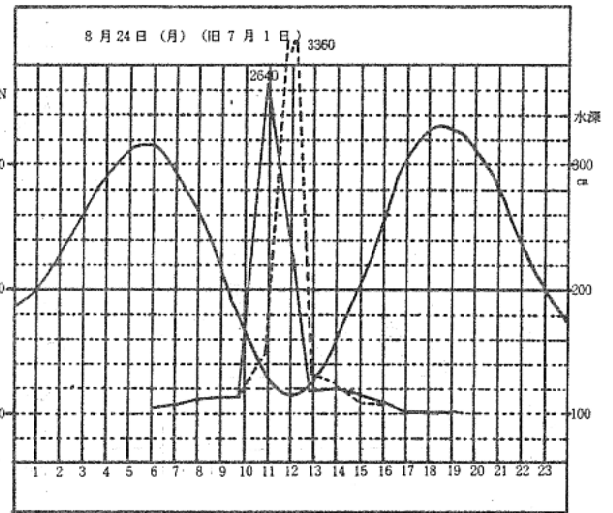
例年よく茸落ちする場所

61年要落ちした場所

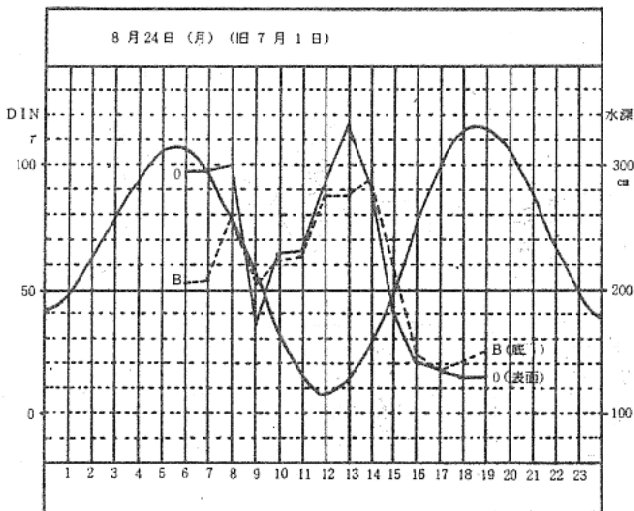




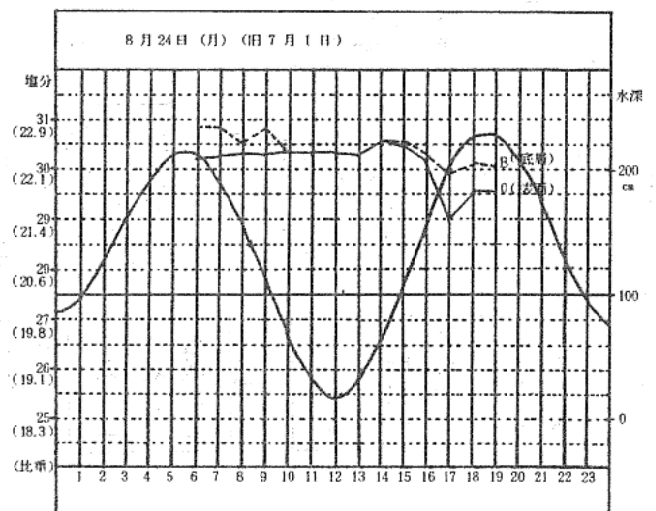
st 5 における水深と塩分の変化



st 5 における水深と栄養塩 (N) の変化

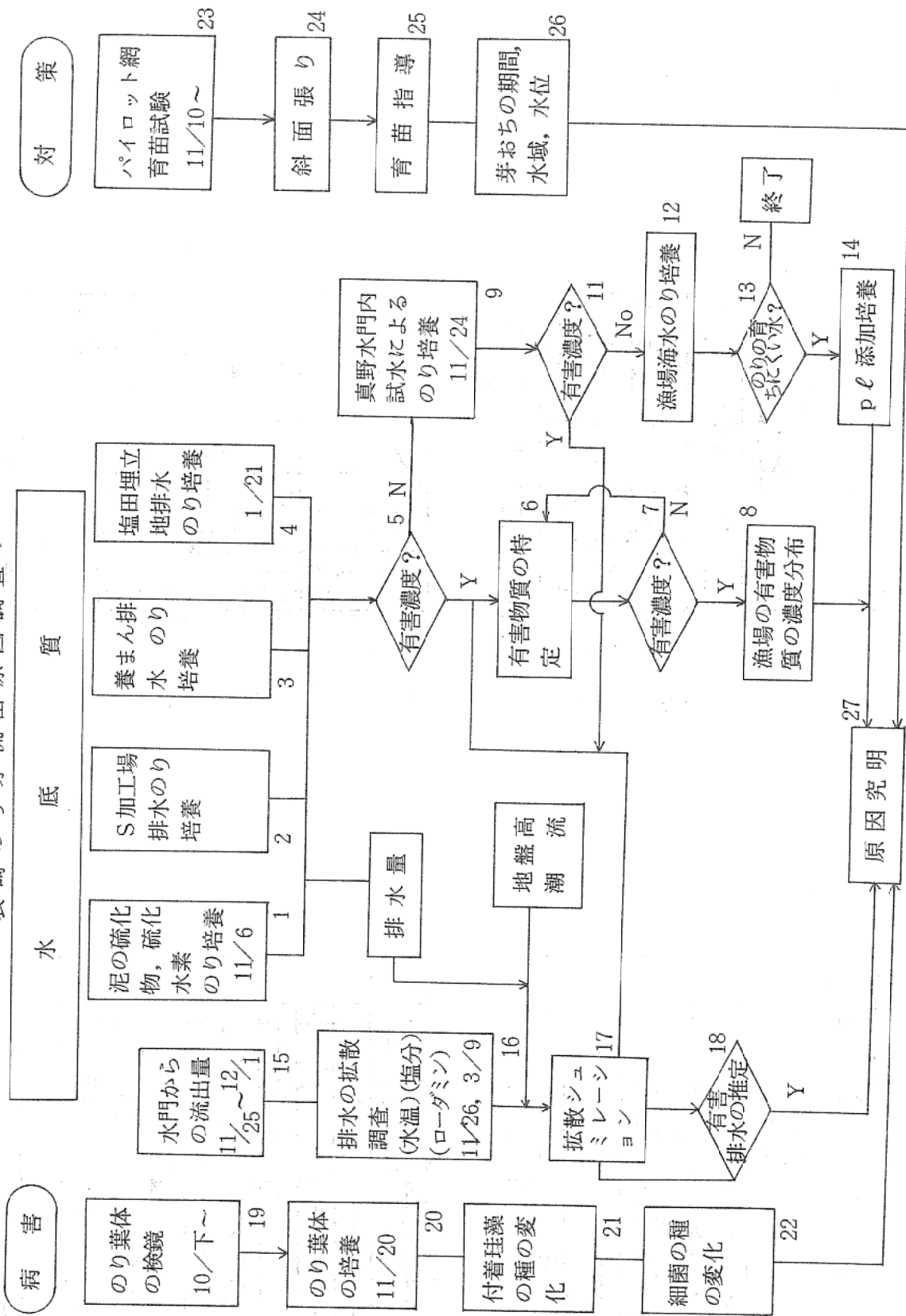


st 7 における水深と栄養塩 (N) の変化



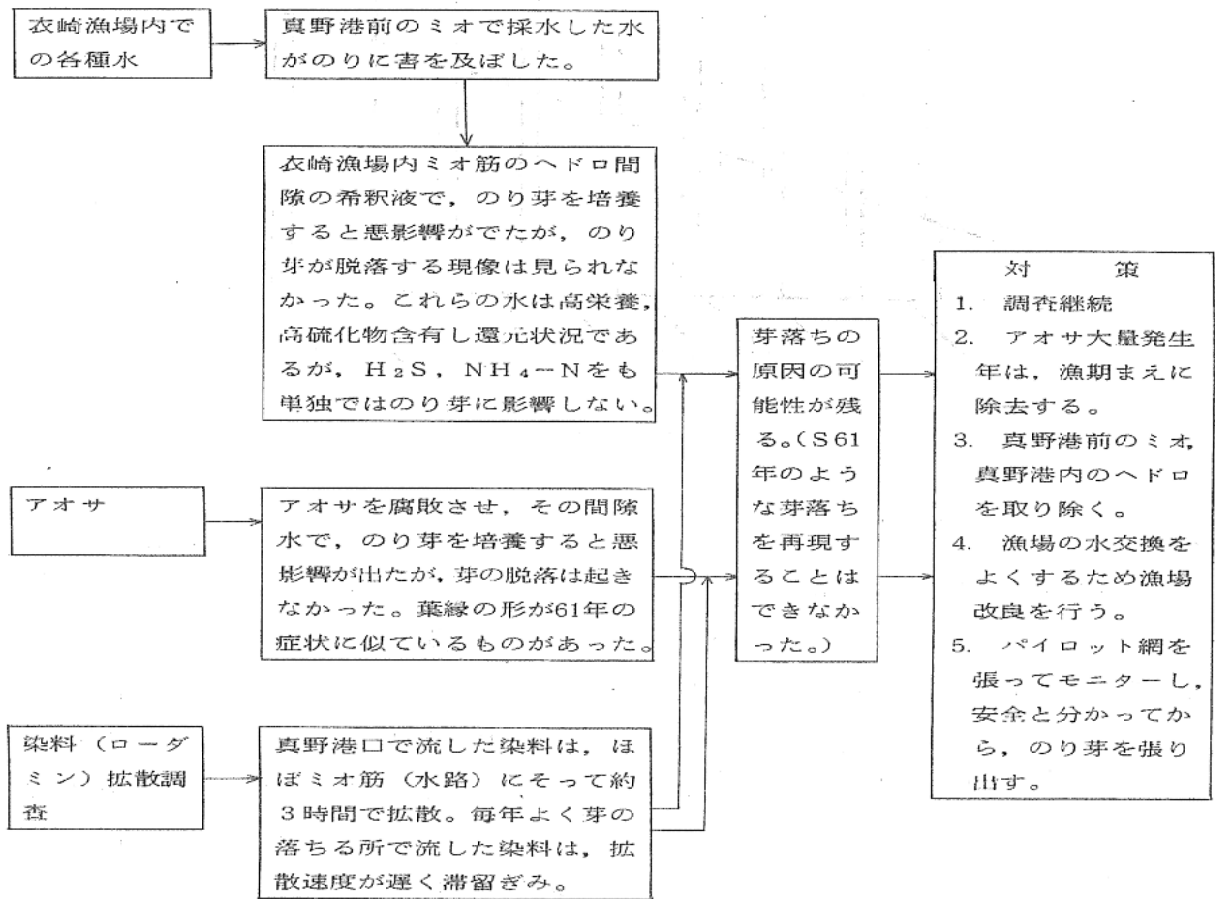
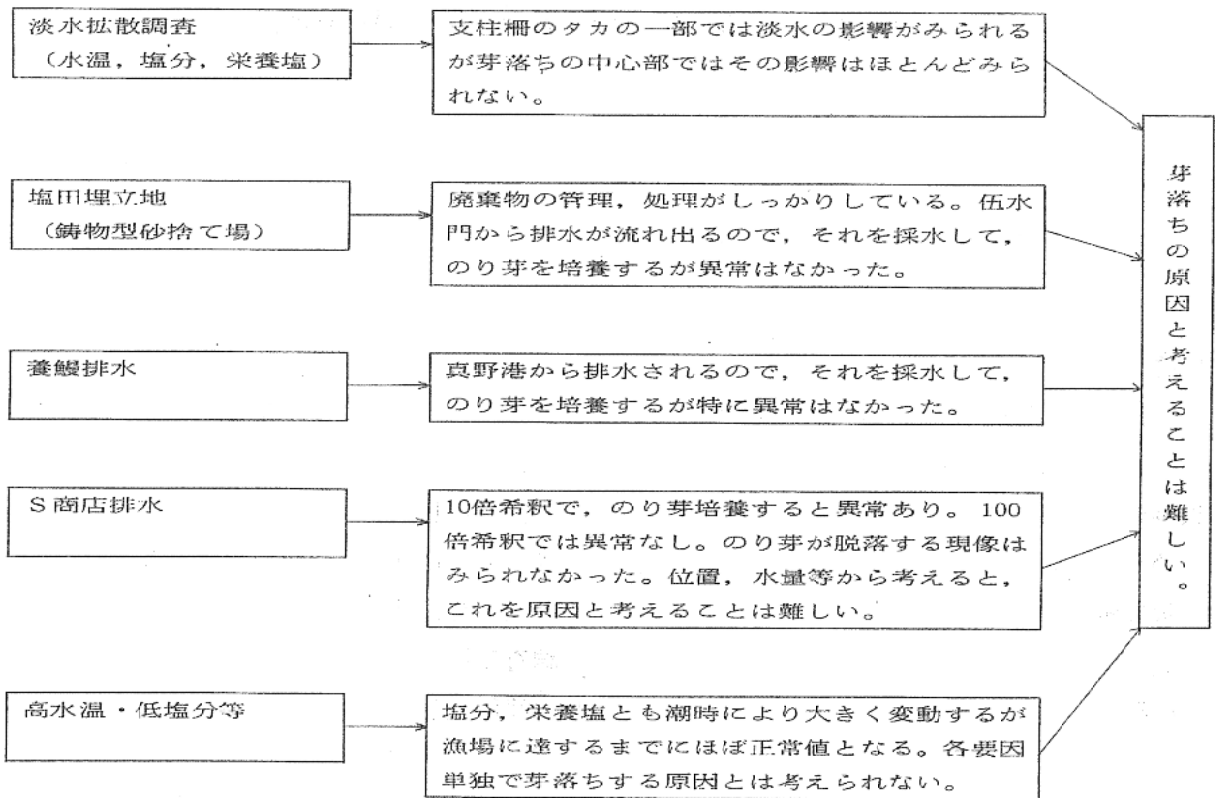
st 7 における水深と塩分の変化

衣崎のり芽流出原因調査フロー



※ 月日は61年実施分

調査結果



ノリ網斜面張りの結果と10号線検証

今泉 克英

目的

62年度の10号線は10月の種付時の予想潮位を昨年より1.6号高めと予想して、名古屋港検潮儀の190 cmに設定した。これを検証するため昨年と同様、斜面張りを実施した。

試験場所

蒲郡市大塚のり漁場試験柵

試験期間

昭和62年10月1日～63年12月28日

試験方法

あらかじめ5日間水平張りで育苗したのり網を10月10日に図1のように張込み、11月23日まで調査した。

さらに、11月以降の養殖水位を把握するため冷蔵網を11月7日に上記の網へ重張りした。

調査項目は水位、クロノリ、アオノリの葉長と芽付とした。

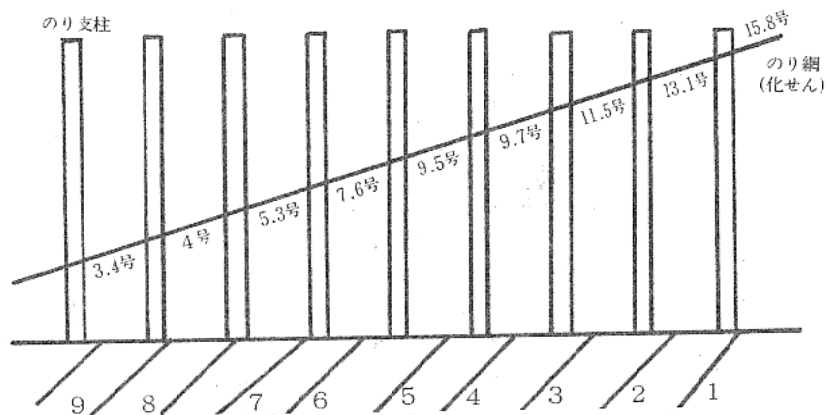


図1 試験柵の張込み方法

結果

(1) 秋芽網による10月の育苗水位

下表のクロノリの芽付、成長および光沢等からみると10月の最適育苗水位は、本年度設定した基準水位の9.5号～10.0号 (No. 4.5) と推定される。それより低水位ではクロノリの成長と健全度は高水位よりまさったが、アオノリが著しく繁茂し生産対象とならなかつ

た。したがって本年設定した10号線は妥当な水位であったと思われる。

(2) 冷蔵網による11月の育苗水位(養殖水位)

冷蔵網による11月の育苗水位は、本年度設定した基準水位の10号線 (No. 4) を中心に、8.5～11.5号と10月のそれよりも適水位の幅が広まった。8号以下の低水位は、葉体への珪藻の付着が目立った。

(1) 秋芽網による10月の育苗水位

10月23日 秋芽網

No.	号線	ク ロ ノ リ				ア オ ノ リ		
		葉長mm	芽付100×	2次芽	備 考	葉長mm	芽付100×	備 考
1	15.8	-	-	-	-	-	-	
2	13.1	1.0	7	0~1	よじれ、くびれ多い	1.2	4	
3	11.5	1.6	2	0	よじれ、くびれ大半	4.5	10	
4	9.7	1.6	4	4	〃	1.2	10	
5	9.5	2.4	3	13	〃	2.0	2	
6	7.6	2.4	4	13	よじれやや少ない	10.0	4	
7	5.3	3.6	2	20	よじれ少ない	20.0	4	
8	4	2.0	10	40	健全	10.0	6	
9	3.4	-	-	-	-	-	-	

10月30日 秋芽網

No.	号線	ク ロ ノ リ			ア オ ノ リ		
		葉長 cm	芽付	備 考	葉長 cm	芽付	備 考
1	15.8	-	-		-	-	
2	13.1	0.1	±		0.1		
3	11.5	0.3	-		0.5	±	
4	9.7	0.5	-		2.0	-	
5	9.5	0.8	±		2.0	-	アオ細葉
6	7.6	0.4	-		3.0	±	
7	5.3	0.6	-	広葉	4.5	±	
8	4	(0.7) 0.3	(±)	広葉	(4.0) 4.0	(±)	
9	3.4	0	-		14.0	+	

11月24日 秋芽網

No.	号線	ク ロ ノ リ			ア オ ノ リ		
		葉長 cm	芽付	備 考	葉長 cm	芽付	備 考
1	15.8	1.0	-		0	×	
2	13.1	3.0~4.0	++	細葉	0		
3	11.5	5.0~9.0	+	つやよし	4.0	-	
4	9.7	4.0~7.0	+	広葉	3.0	--	
5	9.5	7.0~12.0	+	広葉	7.0	--	
6	7.6	10.0	-	広葉	7.0	±	
7	5.3	12.0~16.0	--	広葉	13~14.0	+	
8	4	7.0~16.0	--		8.0~12.0	+	
9	3.4	2.0	--		7.0~12.0	+	

(2) 冷蔵網による11月の育苗水位（養殖水位）

11月22日 冷蔵網

No.	号 線	ク ロ ノ リ		備 考
		葉 長 cm	芽 付	
1	15.8	—		
2	13.1	0.1	—	
3	11.5	0.4	±	
4	9.7	0.5 ~ 1.0	+	
5	9.5	1.0	+	
6	7.6	1.0	+	
7	5.3	0.7	—	珪藻付
8	4	0.7	—	珪藻付
9	3.4	—		

11月24日 冷蔵網

No.	号 線	ク ロ ノ リ		備 考
		葉 長 cm	芽 付	
1	15.8	0.3	±	
2	13.1	0.4	±	
3	11.5	2.0	+	つやあり
4	9.7	3.0	+	つやあり
5	9.5	1.0	+	
6	7.6	1.2	+	珪藻付
7	5.3	0.7	±	珪藻付
8	4	3.0	+	珪藻付
9	3.4			

12月4日 冷蔵網

No.	号 線	ク ロ ノ リ		備 考
		葉 長 cm	芽 付	
1	15.8	1.0	—	
2	13.1	1.0	—	
3	11.5	2.0	++	つやあり
4	9.7	1.5	+	つやあり
5	9.5	2.0	±	
6	7.6	1.0	±	珪藻付
7	5.3	0.5	—	珪藻付
8	4	0.3	—	珪藻付
9	3.4	1.0	—	珪藻付 脱色

(3) 日平均潮位

名古屋港における検潮と潮位表の変動を図2に示した。これによると10月のおくれ3日潮（10月9日）の実測潮位は予想潮位より1号低め、それ以降も大きな変動を繰り返しながら11月まで1～2号低めに経過した。一方、10月20日頃まで気水温は平年より高めであり、

台風も来襲した。このため種網には干出過多による芽いたみ（細胞異常、くびれ、ねじれ）やアオノリの付着がみられのりの育苗にとっては、難しい年回りであった。

このような要因により固定柵による健苗育成が不振に終わったものと考えられる。

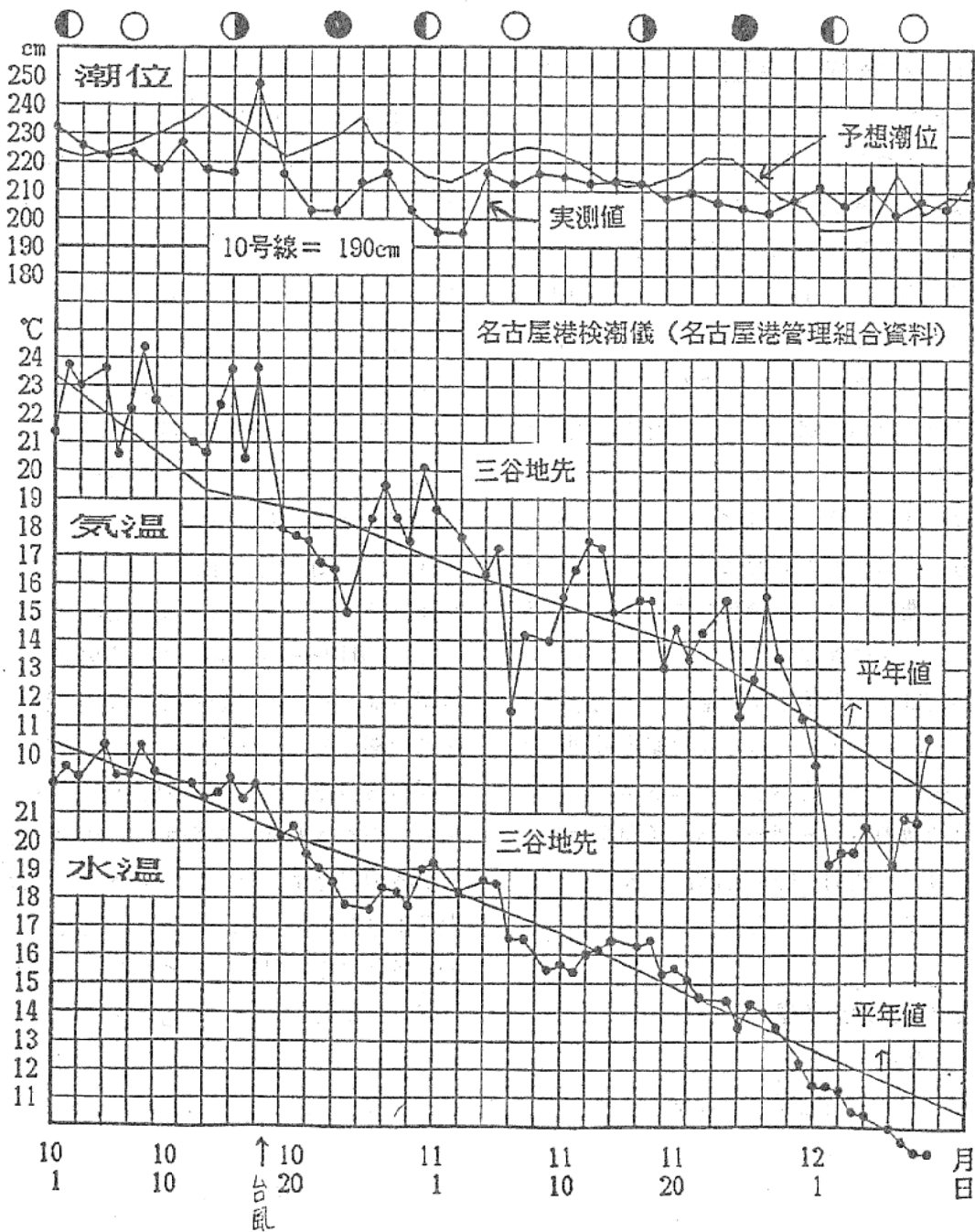


図2 育苗期の気象海況

(3) 昭和62年度ノリ養殖経過と問題点

岩田静昌・今泉克英
藤崎洗右

近年のノリ業界は、経営体は年々減少の一途をたどり、61年度には全国で15,747戸、本県も同じような傾向を示し、1,731戸になった。これは、製造機械の大型化により大量生産が可能になり、58年以降販売価格が低迷しノリ漁家経営を著しく圧迫したことが主な原因と考えられる。この結果、1経営体当りの経営規模が年々拡大し、平均持柵数が56年に130柵が62年には161柵に増え、また生産枚数も56年の364千枚が、62年度には619千枚になり、専業漁家の増加が目立つようになった。

一方、経営規模の拡大に伴って機械化が進み、作業船、ノリ摘機及び製造機械等の大型化と省力化に伴って加工能率が高まり、1日平均20千枚前後生産可能になって来た。

しかし、過去3ヶ年のノリ漁家経営調査によると販売価格に比べ生産コストが高く、とくに償却費の占める割合が高い傾向を示している。今後、個別に経営を診断し改善に向けて指導して行く必要がある。

62年度ノリ養殖の経過

○採苗状況

近年、水車式陸上採苗が普及しており、採苗網数の39%を占めるようになり、とくに知多地区で60%を占め中でも西浜の普及率が高い。陸上採苗は、3～5人グループが共同作業で9月16日頃からはじまり、20～25日がピ

ークで1～2細胞で水切り後入庫した。芽付きは地域の環境特性に合せコントロールした。野外採苗は、三河地区は28日、知多東浜25日西浜は10月5日以降から一斉に採苗を開始した。芽付きは前半が全般に薄目で、採苗後の網ほど濃い網が多く見られた。

○育苗状況

採苗終了後から水温が2℃高めに経過し、アオの付着と網の汚れが目立ち網洗いを励行した。ところが10月17日に台風19号の影響で一部支柱竹の流失があったが、冷蔵庫へ避難しなかった網の大部分が風波ですれ、ノリ芽が痛みその後の育苗に及ぼした影響は大きかった。10月23日の大潮時には予想潮位より2号線(20cm)低めに経過したので、日中干出過多の網が多くノリ芽を痛めた。更に温暖で静穏の日が続き、ノリ芽の活力低下と病害(緑斑病、白ぐされ病)が発生し、親芽の流失現象が各地で発生した。従って薄めの網は、二次芽取りを行い入庫が大巾に遅れた。一方低張り網はアオの付着と汚れが多く、種網作りに個人差が大きく、しかも大変苦勞した年であった。

○冷凍網の入庫状況

ノリ芽の流失と伸び悩みで冷凍入庫が予定より一週間程遅れ、早い地区で10月25日からはじまり、入庫のピークは月末になり遅い知多地区は11月中旬まで入庫していた。入庫網

のノリ芽の状態と活力は、平年に比べアオの付着が多く全般に悪かった。また、入庫網数も個人差があり平年に比べ少なく、柵当り155枚であった。

入庫時、三河の沖側に珪藻赤潮（キートセラ）が発生し極端に栄養塩が低下し色落ちが各地で見られた。一方支柱漁場の潮通しの悪い網にツボ状菌病が発生し、その後拡大し伸び悩みや芽落ちがあった。

○秋芽網による生産

支柱漁場は、11月上旬になっても育苗網、単張り網、病害網が張り込まれており、秋芽生産は11月10日頃から浮流しで初摘採があった。その後浮流網の伸び色が良く順調に経過した。支柱漁場は、11月20日頃摘み残した網から赤ぐされ病が各地で蔓延し摘採を急いだ。

しかし、小潮と重って病害が全域に拡大したので、網の一斉撤去が三河地区は11月末から12月上旬にかけて実施した。知多地区は12月上旬に赤ぐされ病が拡大したので西浜を中心に12月18日までに一斉撤去した。なお、冷凍網が少ないので、1～2回摘採した健全な秋芽網を脱水冷凍した。この網がその後出庫してとても良い成績を上げた地区があった。

このように、今漁期の秋芽生産は、高水温無風、異常潮位、赤潮発生が平年に比べ多発し、しかも種網作りの失敗と重なって反省すべき漁期でもあり、全生産の16%に過ぎなかった。

問題点

○採苗

1. 採苗前の孢子放出のコントロールに失敗し計画どおり採苗出来なかった。これは未成熟の糸状体を高温処理した事例が多い。したがって、事前処理する時は、落下試験と検鏡を実施する。

2. 陸上採苗網の試験糸検鏡は、弱い芽を落とすために試験糸を検鏡前に洗う必要がある。
3. 採苗後の仮植時に水温が25℃を越える時は、水槽の上に寒冷紗をかぶせる。

4. 冷凍入庫時、ノリ網の水切りを十分行う。
○育苗期

1. 近年、潮位の変動が大きく、予想潮位と20cm前後異なるので、支柱育苗は網管理に注意する。とくに大潮時の干出過多を防ぐ。
2. 重ね網の展開を早め、育苗漁場の網数を少なくするために全員が小芽網の短期冷凍を行う。
3. 網の汚れは、網洗いを励行しノリ芽に付着している細菌等も除去する。
4. ノリ芽の活力試験と同時にツボ状菌病の早期発見に努める。

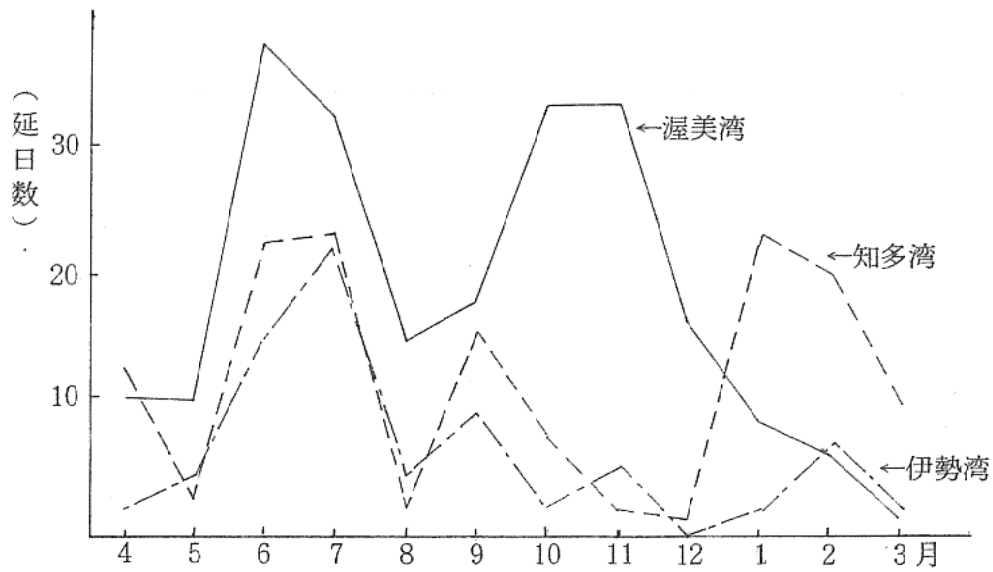
5. アオノリの除去は採苗後10日前後の小さいうちに行う。

6. 入庫前は2～3日連続干出させ、長い芽より健全な小芽網から入庫する。

○生産期

1. 支柱漁場の潮通しが悪いタカ漁場を1～2割減柵した地区が多い。これは毎年ノリ漁家数が減少しているの、多少減柵しても1戸当りの持柵にはあまり影響はない。
2. 11月に入ると支柱、浮流しに一斉に網を張込むので、初摘採が少し遅れると加工が間に合わず摘み残しの網が見られた。加工能力に合った網数を計画的に張り込む。
3. 11月13日の小潮時に赤ぐされ病が発生し、その後各地にまん延したが、一斉撤去日が地区により異なり、また出庫日もまちまちであった。隣接組合で話し合う必要がある。
4. 冷凍網の出庫は、パイロット網の生育状況を見て出庫ならびに網管理を実施する。

62年度地域別赤潮発生延日数

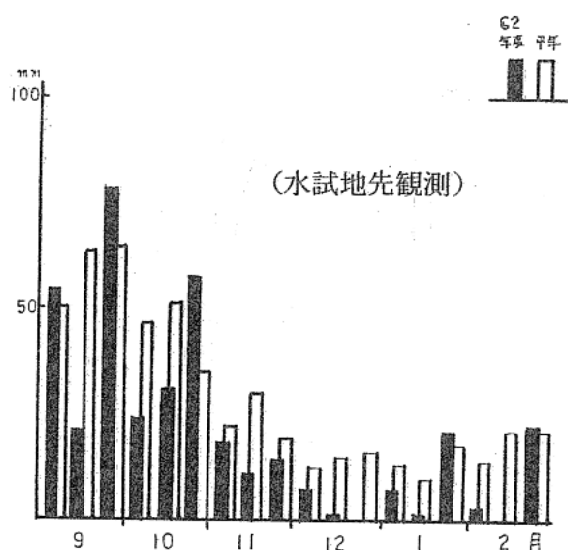


地区別ノリ生産概要

項目	年度 地区	単 位	61 年 度				62 年 度			
			知 多	西三河	東三河	県 計	知 多	西三河	東三河	県 計
ノリ漁家数		戸	740	625	366	1,731	697	556	320	1,573
柵 数	浮流柵	柵	68,277	20,080	16,314	104,671	65,591	19,940	14,488	100,019
	支柱柵	柵	42,357	69,004	54,389	165,750	39,173	65,398	49,454	154,025
	計	柵	110,634	89,084	70,703	270,421	104,764	85,338	63,942	254,044
1戸当り持柵数		柵	150	143	193	156	150	153	200	161
柵 数	野外採苗	枚	—	—	—	—	114,190	173,880	124,699	412,769
	陸上採苗	枚	—	—	—	—	177,100	68,140	14,920	260,160
	計	枚	—	—	—	—	291,290	242,020	139,619	672,929
冷凍網数		枚	—	—	—	—	201,800	130,600	62,110	394,510
柵当り生産枚数		枚	4,326	4,038	1,649	3,531	4,595	4,339	1,911	3,833
共販枚数		千枚	478,594	359,702	116,583	954,879	481,416	370,279	122,173	973,868
共販金額		千円	6,476,780	3,170,295	8,040,252	10,487,327	6,982,439	4,030,074	1,176,151	12,188,666
1戸当生産枚数		千枚	647	576	319	552	709	666	382	619
1戸当生産金額		千円	8,752	5,072	2,296	6,059	10,018	7,248	3,675	7,749
100枚当単価		円	1,353	881	721	1,098	1,450	1,088	962	1,251

(事務所, 漁連調)

旬別降水量



気象・海況

○ 水温

採苗時の9月下旬から冷え込みがあり、野外採苗は順調に経過したが、10月5日から高めの23℃になり平年より1.7℃高く経過した。その後下旬には一時平年並に低下したが11月に入り静穏な日が続き、赤ぐされ病が発生した。更に12月から2月上旬まで平年を上回り、2月中旬から季節風の吹き出しがあって水温はようやく平年を下回った。

このように今漁期は、前半の育苗時と秋芽生産時は高水温期が続き、作りにくい年であった。しかし冷凍網の生産期は、逆に高水温で伸びがあり病害の発生が見られたが、柵当りの生産が近年にないほど増大した。

○ 比重

比重は、伊勢湾、三河湾とも漁期中平年より2.0～2.5高めに経過した。

○ 降水量

本場の降水量を旬別に見ると、平年に比べ少ない年であった。平年より多い時期は、9月上旬、下旬、そして10月下旬、その後極端に少なく漁期終了前に多少平年より多い時期があった。

○ 栄養塩

渥美湾は、9月～12月にかけて赤潮が多発し、育苗期から秋芽生産期にかけて各地で色落ちが見られた。年明けからは渥美湾は赤潮は少なかったが、知多湾の沖で赤潮が発生し浮流し網に色落ちが見られた。

なお栄養塩は、地区別に地先ノリ漁場を定期的に調査し、速報として広報している。

○ 潮位

62年の5月までは、平均潮位は低めに経過したが、6月から変動がはげしくなった。

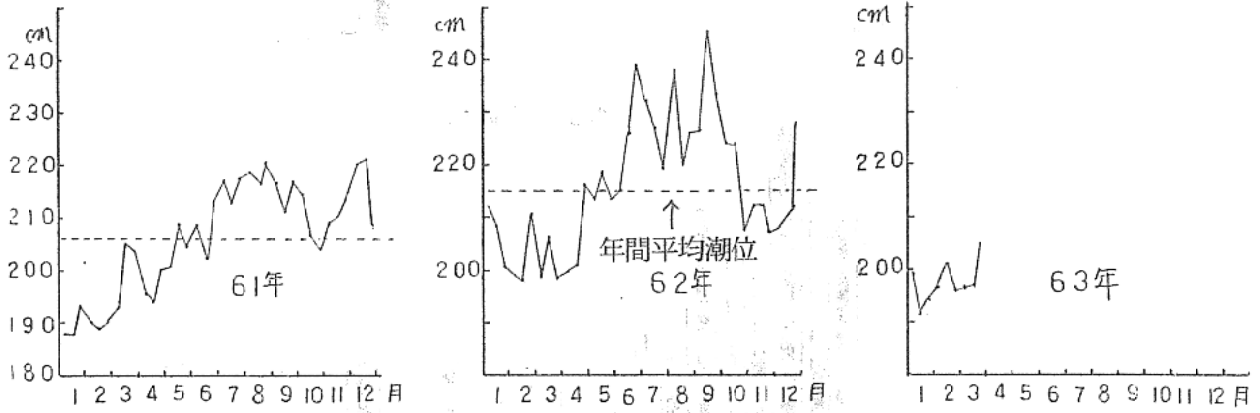
育苗期の10月～11月にかけて予想潮位より20cm低くなり、種網作りに影響を与えた。その後年明けから更に潮位が低下し、平均潮位が200cm前後になった。このように時期により変動がはげしいことがわかる。

○ 汐別生産量

61年度と62年度の地区別の生産量を見ると知多と三河で異なった経過をたどっている。つまり知多は1回汐から順次量産しており、6回汐がピークである。しかし三河は3回汐で毎年落ちこんでおり、その後山を作り8回汐がピークになり、前年に比べ後期に生産の山がある。

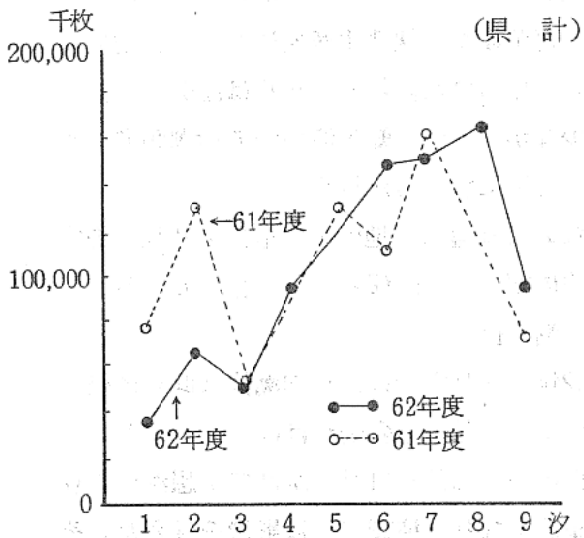
旬平均潮位の推移

(名古屋港管理組合観測)



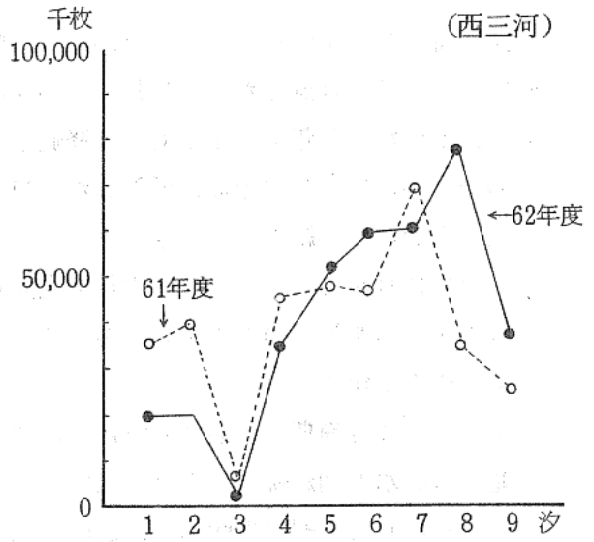
汐別ノリ生産枚数

(県計)

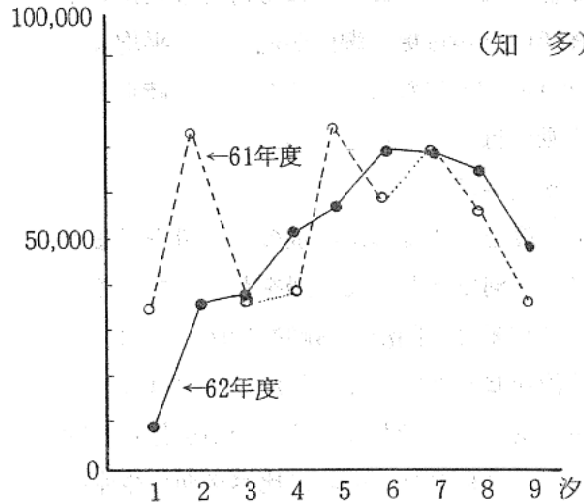


汐別のり生産枚数

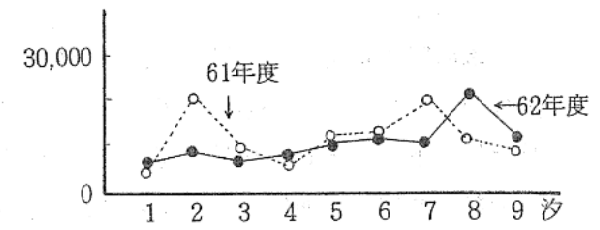
(西三河)



(知多)

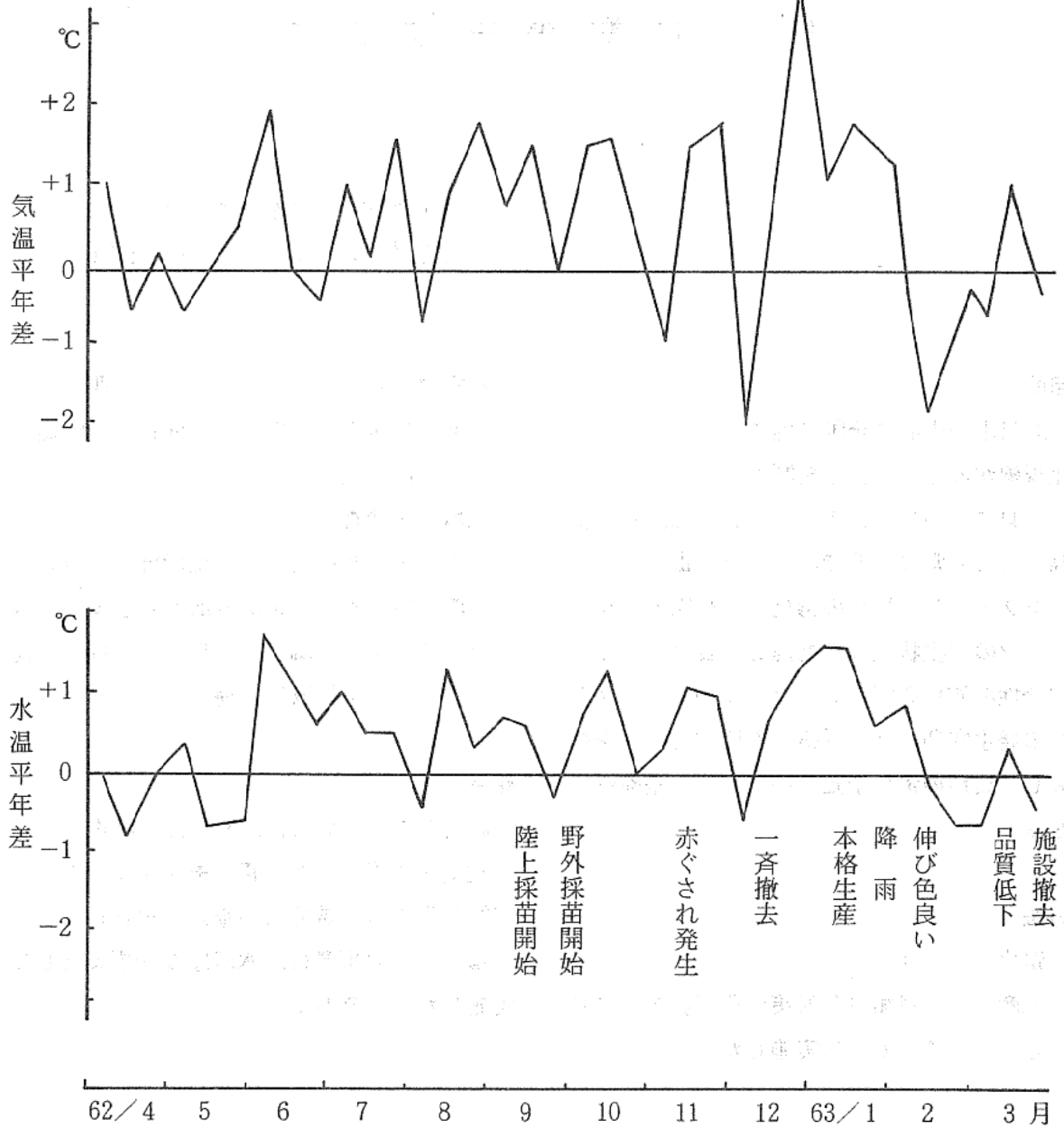


(東三河)



昭和62年度気温・水温旬別平年差

(水試地先)



3 漁場環境保全対策事業

(1) 貝類等実態調査

土屋晴彦・山本民次・平野 稔
水質調査船「しらなみ」乗組員

目的

北日本を中心に全国各地において貝類の毒化現象がみられ、自主規制も実施されている。

本県においても、アサリ等貝類は、水産資源として非常に重要であるので、毒化モニタリングにより、貝類の毒化状況や原因プランクトンの発生状況等を把握し、食品としての安全性の確保を図る。また、原因プランクトンの発生時期、移流経路、季節的变化等を把握し、貝類の毒化予知手法に必要な基礎資料を得る。

方法

毒化モニタリング

水産庁重要貝類毒化対策事業実施指針に基づき、三河湾を対象に実施した。

標本貝のサンプリングは、知多、西三河、東三河事務所水産課で、貝毒検査は、愛知県衛生研究所生物部で実施した。

広域分布調査

同上の実施要領及び、実施指針に基づいて三河湾、伊勢湾口、渥美外海を対象に、原因プランクトン等の調査を実施した。渥美外海のプランクトン採取は、海幸丸の協力を得た。

結果

調査結果については、昭和62年度重要貝類毒化対策事業報告書（毒化モニタリング）及び同報告書（広域分布調査）に記載した。

なお、この事業は、水産庁委託事業として実施したものである。